

江南戦線皇軍慰問記

湖松日出雄

本稿は昭和十三年二月十六日発行の駒澤大學新聞に記載したる『江南戦線を廻りて』に追記したるものなれば同新聞紙上の記事と重複する處あり 讀者諸氏の御諒承を乞ふ。

(一) 出 發

私は昨年十二月廿四日夜東京驛を出發し、上海、南京、鎮江、常州、無錫、常熟等の皇軍慰問をし、併せて戦跡を遍歴して、本年一月廿三日、恙なく歸京した。この僅かばかりの期間、並に戦線ではあるが、彼地の状勢を見た儘感じた儘、率直に記し讀者諸氏の幾分とも御参考になれば、欣快とする處である。

江南曠野一帯にわたる戦線に於ての忠勇なる我皇軍將兵諸氏の難戦苦闘の跡、數萬の英靈、尊き血潮の上に建設さるべき大陸經營、東洋和平確立の大事業こそ東亞之盟主、我日本國民、殊に青年に與へられたる千古未曾有の重大使命と言はねばなるまい。

現在に於ける彼我の状況は、戦争第一主義から戦果確保の所謂第二期とも言ふべき建設期に入つて居る。即ち戦後に於ける治安、行政、経済等々全ゆる部門に亘つての大陸經營積極策の實現こそ、目睫に迫れる重要問題である。

神戸港を後に、二十六日寒風を衝いて、我々一行十名の便乗する上海丸は解纜した。船内は立錐の餘地のない程、込み合つて居た。之等の人々は辛苦の中に皇國の第一線となつて、遠く異郷に涙ぐましき努力をし來たつた我親愛なる同胞であつた。彼等は砲火の渦巻と化した彼地から一時本國に避難する事を餘儀なくされたのであつた。老若、男女、全く着のみ着のまゝで故郷の家、或は内地の知人を頼つて避難したらしく、見るからに寒さうなそして垢でよごれた服装をし小さなトランクを枕元に置き興奮して上海の市街戦、支那軍の殘虐性を語るのので在つた。

祖國愛の焔に、つゝまれつ、船は寒波を押し分けて進んで行く。

船はやがて揚子江に入り崇明島を右舷に見つ、黃浦江に入る。やがて吳淞砲臺である。次第に河幅も、狭くなり左右兩岸の破壊された諸工場の跡も判きりと見え始めた。行き交ふ小船には皆日章旗が揚げられ船内の兵隊さんは幾月振りで見ると日本の船に咽喉も裂けよとばかり涙の萬歳を送つて呉れる。我等船内の日本人も、たゞ涙と共に之れに應へるのみである。二十八日、午後小雨降る中をS・Y・K・碼頭に到着す。

(二) 國際都市上海

上海——今は全く破壊されきつた戦跡上海は無氣味な程靜かだ——に上陸した我々一行は、碼頭に出迎へて下さつたT

氏と直ちに〇〇武官室へ、雨の中を徒歩で向ふ。壊れてゐる實によく壊れて居る私は都市の破壊の最もひどいもの、實例として、彼の大正大震災の夫れを知つてゐる。併しそれ以上ひどく壊れてゐるのだ。〇〇武官室にて慰問の辭を述べ我々は〇〇地にある〇〇人の家を一時拜借する事に決定した。

二十九日我々は破壊された國際都市上海市内を——閘北一帶及舊英租界、佛租界——視察した。

曾ては五彩のネオンに色どられ、煽情的ジャズの渦巻いて居た國際的歡樂キャバレー街たりし北四川路附近も、亦エキゾチックなトルコ風呂街老袍子路も滅茶苦茶に壊れ、たゞその醜骸をさらし破壊その極に達し、我々をして過ぐる數ヶ月前の激戦を思ひ出させずには居られない。到る處にバリゲートが構成されて在り今猶陸戦隊の哨兵が隨所に警戒にあたつて居る。

然しながら一度ガアデン・ブリツチを渡つて一步、舊英租界に入るや、蘇州河以北の靜寂さに比し南京路、福州路、アベニウ、ジョツフル路等は大厦高樓聳え立ち夜ともなればネオンはまばゆきばかりに輝き、タクシー、二階建バス、無軌道車、さらに黄包車等々處せましと大路を走りその繁華雜沓驚くばかりであり。南京も陥落した今日、我々が百貨店に入つて買ひ物等をして、支那人は「この東洋鬼奴が」と言はんばかりの顔つきの下に、こちらから問ふ事に對し返事すらしない有様、しかも日本金百圓は今自滅の道を辿りつゝある蒋介石の發行した紙幣九拾八圓にしかならぬとは、全く意外であつた。

然し此等の雜沓の中に、其華麗さとは凡そ似ても似つかぬ蒼白き、寒さと餓えに密集する支那人の一團、或ひは道行く人に物を乞ふ憐れな支那人の姿を我々は隨所に見出した。之等の哀れなる支那人は毎日平均五十名位づゝ餓死するの餘儀

なき状態にあり南京路等の裏街に群れる細民の慘狀は正視し得るもので無かつた。

更に新聞の報ずる如くテロ行爲は毎日の如く工部當局の嚴戒に反比例して頻々と起る。斷末魔の抗日共産分子の暗躍、それは我々の想像だに及ばぬ所であらう。

蔣政權は最近八百名の藍衣社一味を上海へ向けたと噂され、その他杜月笙一派の青年結社、佛租界中の〇〇暗殺團等、ダーク、シテイー上海を表らはすに充分である。

さらに共産黨の暗躍はソ聯のG、P、Uと手を携へ『〇〇主義に依る中華民國獨立』等のスローガンを掲げ〇東書〇局に頑張るソ聯のコンスタンチノフ大佐を中心に懸命に運動を續けてゐる。

之等の諸活動と共に、今世界に四百八十萬人の會員があると稱するフリメイトソンの秘密結社を有し財政的には某國の全資力、いや全世界の金を動かす強固なる力を持ち、シオニズムを眞向から振りかざし征服者に對する強烈な復讐心を有するユダヤ人の監視的眼、彼等の青き瞳は何を見、彼等の脳中には如何なる考へが往來してゐるか。

吾々は、彼等の活動を恐れる事はない。しかし、常に大いなる關心、注意の眼を以て冷靜に彼等の行動を見ねばならぬ。過去に於ける我等人類が相遇した最も不幸事とも言ふべき戦争史を見よ。ユダヤ人が關係せぬ——と言ふよりむしろ彼等が潜勢力たり得なかつた事件が果して幾つ在つたらうか。日清、日露、世界大戰、滿洲事變、或ひは今回の日支事變、彼等ユダヤ人は、その裏面に於て大いに關係し、辛腕を振つてゐるではないか。

ユダヤ人問題は、蓋し日本に於ては輕視され勝ちであつた。この事は如何にユダヤ人の活動が世界人類に對し、無刺戟の中に刺戟を與へ得るかと言ふ彼等獨特の戦法に外ならぬのだ。

國家を有せざる彼等の行動は、第三國たる某國の軍隊をも動員出来るし、亦世界の大多數の言論機關をも左右し得るのだ。そしてその思想は、ソ聯に於ては共產主義となり、米國に於ては資本主義となり、支那に入つては三民主義の原理となり、進んで抗日思想に迄變化し、今では「打倒日本」^{カタタオリイベンヌ}の叫びに迄なつて來てゐる。

さらに彼等の魔手は、我國に迄その手を延ばし、三S主義に見る彼等の成功は我等をして層一層警戒を嚴にするの要を感知せしめる。

この地、上海を死守せんとする彼等の裏面政策は、我等に迄感知し得る程表面的になつてゐる。……
上海市内の戦跡を一巡した我々は、首都南京へと、歩を進めた。

(三) 南 京 へ

我々一行は大晦日の早朝、破壊されきつた上海北停車場から、貨物列車に便乗させて貫ひ一路南京へと向ふ。

支那軍の自國鐵路の爆破は、上海から南京迄、實に澤山やつてあつた。鐵橋と言ふ鐵橋は、大なり小なり、皆爆破されてある。爲に南京迄普通の二倍の時間を要する。

午後四時半、常州に到着、

こゝで今夜は一泊、兵站部を訪ねて、一宿一飯を乞ふ。上海と違つてローソクの下での夕食、常州の夜を兵站部長の戦後感想にて送くる。着のみ着の儘、床の上一同ゴロ寝、そろ／＼内地では除夜の鐘の鳴る頃、寝につく。

明くれば昭和十三年一月一日

元日の早朝五時半、兵站部に別れを告げて再び常州站へ。貨物列車に便乗し敵主都南京へ！

南京に近づくにつれて、線路の兩側に敵死體の數が多くなる。午後四時半、南京下關^{シヤカンヂヤヌ}站到着、站前はブス／＼まだ煙が出てゐる。

煉瓦の破壊された跡は山となり鐵骨はアメの様に曲つてゐる。そして一種異様な死體の臭ひ、血腥き臭ひ、新戰場に來た感じがする。

故郷^{コキョウ}を思ふ兵隊さんは、自分の部隊の玄關に内地で見るのと決して劣らぬ美しい門松を立て砂をまいて、きれいに掃除して戦地の正月を迎へてゐる。母國を出發して始めて内地人を見る兵隊さんの多いこの地では、行き交ふどの兵隊さんもどの兵隊さんも飛びつかんばかりに、喜び握手し、時間の許す限り内地話しに花を咲かせる。

我々も出發する迄の内地の事は知つてる限り話す。そして兵隊さんからは戰場の話をお聴かして貰ふ。内地の煙草バツトを上げて喜ばれたのも、この時だ。

元旦の夜は、南京城外、二千米の地點にある藤田部隊に一宿を乞ふ。部隊長は日本大學の配屬將校の方で我々大學生一行を非常に歓迎して下さいました。何だかこちらが慰問されてゐる様で、恐縮した。城外の事とて水道は破壊され、クリークの水を飲用に使用するのである。

このクリークには未だ敵死體が浮んでゐる。我々もこのクリークの水でたいした夕食を頂いた譯である。この營舎は二階建のスマートな建物で、この營舎の前のコンクリート建の立派な建物と二つだけ、ぽツンと破壊された廣場に立つてゐる

のである。しかも前のコンクリート建の建物は、全然使用して居らぬ。建物が少くて兵隊さんが寝る處もなく困却してゐる時に何故前の建物を使用せぬか、之れが私の疑問であつた。早速、宿舍前のコンクリート建ての建物を見に行く。行つて見て私は實に感歎感激したのである。それはその建物が病院なのである。この附近は我荒鷲部隊に依つて爆發されたのであるが、病院等に對しては決して爆彈を落さぬ。こゝに我空軍の實に正々堂々とした武士道的精神を窺ひ知る事が出来る。と同時に我空軍の爆彈命中率が如何に正確であるかを實際に知る事が出来る譯である。

今は住むに人なき建物であるが、内部の秩序は支那正規兵がかき亂した以外は、何もしてない。それは入口の封印で知る事が出来た。

屋上には日章旗が翻がへり、無事にこの病院は維持されてゐる譯である。建物の周圍を一巡して宿舍に歸へる。

二日、早朝城内に入る。宿舍も南京〇〇〇〇に移す。此處で我々は微力とは申すもの、軍のお手傳をさせて貰ふ事になつた。

仕事に取りかゝる前に城内視察に向ふ。城外の慘憺たる破壊に比し城内はそれ程でもなかつた。主都南京の名所舊跡は我空軍の情けに依り事なき状態に在つた。

先づ中山門上に登つた私は、あつと聲を出さんばかりに驚いた。城壁の上は、自動車二臺は充分並んで走れる廣さだ。しかも到る處に交通壕があり、鐵板その他に依る「掩蔽」は悉く完備されて居る。そして我が勇士の猛進し來る方に向けて銃眼が作られ、支那軍は高所から、ねらひ射ちをするのである。そればかりでは無い城壁の約百米前には幅四、五十米のクリークが行く手をハム大蛇の如く、青黒い水を、たゞへて城壁に沿ふて作られてある。クリークの前の畑――

主に綿畑の様にしたが——の中には地雷をギッシリうづめてあるとか。城門は固く閉じられ扉のうしろは、「バリゲード」「鐵板」「鐵棒」と言ふ具合に實に完璧の防禦陣を布き、皇軍を迎へ射つた譯である。さらに城外の近くには紫金山があり、こゝに砲陣をならべて、自國軍の有利を計つたのである。されど無敵皇軍の前には此等物質的掩護物は、完全に打ち破られ、大和魂は、この難關を貫いたのである。城壁上高く翻へる日章旗を見て、私は胸に熱いものを感じ、しばし瞑目合掌した。

城内のメイン・ストリートを歩く我々を驚かした事は防空壕の完備であつた。「ソレツ飛行機」「空襲」と言ふ時は、通行人は全てこの壕内に入り難を免かれ、通りに面する諸商店は各家ごとに、その裏庭に或ひは裏の小路に家族のみを收容する壕を、掘り此處に空襲の難を避けたのである。我等は東京に於て敢て、かゝる事を眞似る必要はないにしろ、大いに研究工夫せねばならぬと思つた。

中央軍官學校を訪れた我々は、抗日少壯將校製作所の我々の豫想以上の徹底した教育振りを諸々に見出し得た。一例として、正門を入つて、突き當りの雨天訓練場裏にある圖書館であつた。三民主義、共產主義の本は、勿論澤山あつた。その中に、日本語で書かれた本、(言ふ迄もなく著者は日本人)雑誌或は各日本の諸大學研究會雜誌等——私は慶應大學の三田文學を非常に多く見かけたすべて、よく讀まれた形跡が歴然としてゐた。

彼等の日本研究熱は、我々が支那問題を研究する程度には或ひは彼等も日本の事を、根掘り葉掘り、調べたに違ひないと思つた。がそれにしても、何と誤れる研究を彼等は數多くした事か、秀才もそうなつては、少しド、ン、才に近くなりはないか。……………

一月三日から我々は〇〇に屬し愈々お手傳ひをさせて貰ふ事になつた。

即ち南京避難民區に住する約三萬の避難民整理及、敗殘兵のピツク、アツプである。この避難民區とは御承知の方もある事と思ふが、南京陥落前十一月中旬、獨人ラーベン氏を會長とし、米人十四名、獨人七名、白系露人二名の委員に依つて組織された國際委員會の庇護の下に設立された、或一定の地域を持つ避難民區の事である。

この難民區内には敗殘兵も居るが、戦火を逃れるに費用なく、全く衰れた状態にある下層階級の集まりも居つて、その生活は實に慘憺たるものだ、怯えきつた青白い顔、寒さに震えながら「日の丸」の國旗を持ち、茫然と佇みつゝ、日本人さへ見れば敬禮する老爺老婆、餓えたる乳兒を抱へ、今は全く乳さへ出ない、うら若い母……等が避難民區内にある金陵男女子大學に收容されて、あちらで生れると思へば、こちらで死ぬと言ふ、あんばいで「人生の縮圖」とでも言ふべき哀れな現狀であつた。

之等の慘狀は、皇軍の手に依つて續々と好轉せられ、青色主顔にも生色が甦えり「君が代」をまわらぬ口で歌ふ子供等皇軍勇士と爆竹を打上げつゝ、戯れる子供等の顔にも喜色が溢れ抗日のポスターに代る「歡迎大日本軍」のポスター、農夫の野邊に春陽を浴びて耕作する姿も次第に多くなつて來た。

我々のお手傳ひは、〇〇に關する事であつた。一月十日、南京を後ろにトラックにて鎮江へ。

鎮江までトラックにて砂塵を浴びつゝ、寒風の中を走る。城外に出ると悪道路で車から體が飛び出そうだ。鎮江にて久方振りに入浴。支那鳳呂に入る。風呂の有難みが戦地で始めて解かつた。

兵站部に一泊、深更まで兵隊さんと語る。翌日無錫に入る。この地は上海に次ぐ江南地方に於ける工業地帯で、寒山寺で有名な蘇州が京都なれば、こゝは大阪と言つた工合。相當の破壊は過ぐる激戦を如實に物語つて居るが逃ぐるに懸命であつたらしい支那軍は、城外の站附近で抵抗をしたのみで城内は單に掠奪されたのみであつて、家屋の破壊は少くない。住民の大分は今は歸宅し、各商賣もそろ／＼始めてゐる。しかし人口廿七萬乃至三十萬と事變前は云はれたこの地はまだまだ空家が多い。

(五) 再び上海へ

十四日、再び上海に歸つて來た。先きに南京へ向つた時とは凡そ見違へる程、賑やかになつた上海。破壊された道路にも、街燈がつき、夜も人通り多く、各商店（大部分日本人）も開店し、小學校、女學校等も授業を始め、バスも通り始めて居る。僅か十二、三日間に、かくも早やく復興への曙光が見えたとは……

日本人の優秀さに驚くのは獨り外國人のみならず私自身も驚きの目を、みはつた。

この復興に比例してスパイ戦は實に凄慘を極め各國入り亂れて暗中飛躍し死に物狂ひの蔣介石の忠實なる手下は苦しまぎれのあがきとして、毎日テロ行爲を續行し、東洋に喰ひ入るユダヤの青き瞳を喜悅させてゐるのだ。我〇〇機關の冷靜

なる活動は第三國の潛入的行爲の入口を無くし合せて誤れる思想線を、徘徊する支那人を迷夢より目覺まし、東洋永遠の平和建設に、絶大なる効果を擧げつゝある。

その苦心!! その努力!! 我々は感激感謝の心あるのみ。江南の大玄關、上海を如何に掃除して行くか、そして打ち水するかは、今後の來訪者をして如何なる態度に出でさせるか、奥座敷で、のんびりかまへ込む心臓の強い客が續いて訪ね來るかが大いなる問題である。

(六) 東京に歸へりて

今、東京に歸へり來つて、國內を見る時實に遺憾に堪えぬ事が多い。

戦争は、どこにあるかと言ふが如きこの空氣——或ひは、戦争あるを知りその如何に重大なる意義の有するかを知覺して、冷靜さを保持してゐるなら非常に有難いのだが——

「熱し易く、さめ易き事藥罐の如し」と言ふ我等日本人の長所でもあり短所でもある特質は、良く外國人のつけ入る處となるのでは無いだろうか、國民精神總動員のあの大旗は、決してたゞ色めた殘骸を止めるのみで在つて欲しくない。

讀者諸氏よ、大いに禪をしめ直し、迷へる支那四億の民の夢を覺まし、東洋久遠の平和實現に協力しようではないか。

(昭十三、五、五)